



来[3]

3月2日

Sudden Fiction Project

高階經啓
hirotakashina

3月2日のおはなし「来[3]」

部屋を片付けてさっぱりしたら、景気のいい声が近づいて来た。

「おうっ！ どうでい、調子は！」

「さっきまでは良かった」

「いまはどうした？」

「おまえが来たから調子が狂った」

「ご挨拶だな。こちとら約束だから来てんじゃねえか」

「何だよ約束って」

「あれだよあれ、あのからっきし何だったべらぼうな何のあれが」

「せわしねえやつだな。ちったあ落ち着きねえ。そんな砂つぶ撒き散らされちゃ、せっかく片付けた部屋が台無しだ。まあ水でも飲んで」

「水？」

「水だ」

「水があるのかい？」

「なけりゃあ出さねえよ」

「まいったねこりゃ、へへっ！ 水をいただけるんでげすかっときたもんだ」

「そんなタイコモチみたいにならなくても水くらい出すよ。ほらちょっとだけ大事に飲みな」

「お、こりゃあ何とも、水のように透き通ってらあ」

「まあ、水だからね」

「たはっ。聞いたかい？ 揺らしたら、たぶん、なんて言いやがる」

「そうかい？」

「ほら、たぶん！ な、たぶん！ おおおっと、いけねえ。危ねえ危ねえ。あやうくこぼしちゃうところだったよ。ぜんてえ、水ってえものは古来、覆水盆に……」

「能書きはいいから早く飲みなよ」

「んじゃあ、遠慮なくいただくよ。んぐっんぐっんぐっんぐ」

「嘶家が酒を飲んでるみたいな飲み方をしやがる」

「ぷはあ〜っ。うまいね。こんな純度の高い上物のブツはなかなかお目にかかれねえ」

「おいおい人聞きの悪いことを言わないでくれよ。いま世間じゃそういうの、何かとうるさいんだから」

「安心しろ。尿検査は絶対に断るから」

「だからそういうことを言うんじゃないよ。で、何なんだい、そんな泡食って駆けつけて来て」

「おう、それだ！ まあ聞きねえ。こないだ湯島砂丘で見つけたあのケツタイな入れ物覚えてるか」

「うん。薄気味悪いものがいろいろ詰まっていたって」

「おうよ、おれあホントに驚いたんだが、あれがおめえさんの言ったとおり、やっぱり生き物らしいんだ」

「生き物？ 本当に？ あれが？ 歩き回りでもしたか？」

「冗談言っちゃいけねえ。あんなのがうろちよろし始めた日にゃあ、おれあおっかなくてこうやって外に出てくることもできやしない」

「じゃ、どうして生き物ってわかった？」

「それがさ。あいつら水を吸って育つらしいんだ」

「水をかい？ 贅沢なやつだね」

「うちの研究所はほら、金さえかければ水はつくれるからってんで、あいつらにくれてやったんだ。そうしたらどうなったと思う？」

「お礼を言った」

「しゃべらねえよ！ あいつらはしゃべらねえよ。人間じゃねえんだから。つつーか、こっちはあれが生き物だってだけで驚いてるんだ。しゃべったらまずそこから話すだろうが」

「じゃあ降参だ」

「大きくなるんだ」

「予想もできなかったな。水を吸って育つって聞いてなければ」

「るせーな。聞いて驚くな。あいつら空気中から炭素を取り込んで大きくなりやがるんだ」
「またまた」
「何だよ、『またまた』って」
「ご冗談を」
「冗談じゃねえって。どうやってんのかはわからねえが、空気中の二酸化炭素を取り込んで、中でばらして炭素を身体に組み込んで、その分だけ大きくなって、残った酸素を吐き出しているらしい」
「なんだって？ 酸素を自力で創り出しているってのか？」
「おうよ」
「んなバカな話があるもんか。そんなものがあつたら、おれたちの科学なんてまるきり要らなくなっちゃうじゃねえか」
「間違いない。炭素を取り込んで、酸素を出している」
「信じられんな。どのくらいの勢いで大きくなるんだ？」
「大したことはない。でもなんだか薄気味悪いひらひらした緑色のものをどんどん増殖させているのが気になる」
「緑ってどんな色だ？」
「そうさな、おまえの家なら寝室の壁の色をもうちょっと濃くすると緑だ」
「自然界じゃ見かけない色だな」
「薄気味悪いよ、まったく」
「で、どうする？」
「だから持って来たよ」
「なにをっ？」
「ほら約束だからよ。おまえにやるよ。ほら。この入れ物ごとくれてやる」
「やめろ。悪い病気にでもなったらどうしてくれる」
「えんがちょ切った！」
「んのやろ！ 待て！ 何しやがんでい、こんな薄気味悪いもの！」

* * *

「おじいちゃん、ひょっとしてそれ」
「ああ、そうだよ。これさ。立派に成長して日陰をつくってくれている」
「おじいちゃんが若い頃には木がなかったの？」
「なかった。こいつが空気中の炭素を溜め込んで、酸素を吐き出してくれて、仲間を増やして、それからだんだん緑色のものが増えだしたんだよ」
「信じられないなあ。で、結局それが入ってた入れ物って何だったの？」
「古代文明の遺物さ。文書も同梱されていてな、判読できた文章にはこうあった。『子孫へ。これに水をやって日の光に当てろ。快適な環境を約束する』とな」
「ふうん。昔の宗教か何かなのね」孫娘は細かい剛毛に覆われた肢を4本使って、木の葉をかき分けながら言った。「でもわたしたちには酸素が多過ぎるわ」
「まったくだ」8本肢の祖父は複数の目をキラキラさせながら言った。「よくまあ悪い病気にならずに生きて来れたと思うよ。こいつを育てて良かったことと言ったらうまい虫が増えたことくらいかな」

(「約束」 ordered by tom-leo-zero-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

● [「SFPインデックス」](#)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

来[3]

<http://p.booklog.jp/book/45175>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/45175>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/45175>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.